

---

# 粉挽き女と傭兵男

イパンジー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

粉挽き女と傭兵男

### 【Nコード】

N0256N

### 【作者名】

イパンジー

### 【あらすじ】

ドミニクは十八になる傭兵だった。たまたま立ち寄ったコンピエーヌという街で、彼は一人の人物に出会う。「くそっ！ とっ捕まえてぶん殴ってやる！」。そんな出会いから始まる冒険活劇……のつもりです。

晴れ渡った空に暖かな気温、そして涼やかな風。

ここ数日続いている爽やかな気候とは裏腹に、ドミニクは荒んだ気分で道を歩いていた。

トリステイン王国首都トリスタニアから馬車で北に約二日。

そこにコンピエーヌと呼ばれる街があった。

首都と北方をつなぐ交通の要地であるこの街は、北から南へ、はたまた南から北へと、ひっきりなしに商人や傭兵訪れるため、普段から実際の人口の十倍もの人々が滞在している。

とりわけ大通りはそういった人々を対象に、連日数多くの出店が開いているため、道を歩くのにも苦勞するほどだった。

その混雑した大通りを、ドミニクは肩を落としてとぼとぼ進む。

大きな体に貧相な革の鎧。背には槍と布袋。見るからに傭兵といった風情の男だ。

賑やかな通りの中、一人どんよりとした空気を背負うドミニクはいささか目立っていた。

先ほどから数人と肩をぶつかけたりもしているが、文句を言おうとした彼らは一様にドミニクを見ると、すぐさま視線を逸らして歩き去っていく。

それも仕方がない。今のドミニクはまるで死んだ魚のような瞳をして、まるで夢遊病者のような足取りで歩いているのだ。常人ならばあまり関わり合いたい手合いではなかった。

十八という年齢を考えればしてはいけない表情を浮かべているのだが、何もむやみに人に避けられるような趣味を持っているからというわけではなく、一応ちゃんとした理由があった。

その理由というのはつまり、

「金がねえ……」

といったシンプルなものである。

傭兵稼業を始めて早二年。いまだ十八という若輩でしかない彼は、日々の生活費を稼ぐのも一苦勞だった。とりわけここ数週間はこれといった仕事がなく、雀の涙ばかりの貯蓄を切り崩していたのだが、それももう限界。

懐から金を入れた袋を取り出し覗いてみれば、中には銅貨がわずかに五枚。

固いパンをひとつ買えばそれで終わりだ。

一昨日からすでに水しか口に入れておらず、もはや歩く気力すらなくしつつある。

早いところ仕事を見つけないければ、数日後には道端に一つ、行き倒れた死体が増えることだろう。

もつとも仕事が見つかったとして、果たしてこのような体調でまともにこなせるかどうかは疑問であるが。

ともかく仕事を見つければ仕方がない。

どこで見つけるかといえば、やはり定番は酒場だろう。品のない荒くれどもが集まるといえば、酒場か安い娼館かくらいだ。金のない身で入れてもらえるかわからないが、ここでくだを巻いているよりはマシ。

そう考え、ドミニクは先ほど通行人から聞いた酒場へと歩き出した。

大通りから道を一本外れると、がらりと辺りの景色が変わる。

多くの人が行き交い飲食店なども軒を連ねているため、少なくとも見た目には汚れなど全くない大通りとは違い、こういった横道はあちらこちらにゴミが散乱し、わずかな異臭も漂う。

もつとも、ここコンピエーヌは比較的大きな都市であるので、こんな通りでも人は少なからず通るのだろう。以前いたここより小さ

な町の狭い路地は、こことは比べ物にならないほど汚れていた。

そのためドミニクはとくに気にした様子もなく足を進める。

ちらほら見える薄汚れた看板を眺めながら歩く。するとよそ見をしていたのが災いしたのか、ドミニクは前から人が歩いているのに気づかずぶつかってしまった。

その衝撃を感じてようやくドミニクは人とぶつかったのに気づいた。

見上げるような大男ではないにしろ、ドミニクは傭兵をしている若い男だ。体格もそこらの一般人よりも立派なものである。そのためぶつかった人物もドミニクの体に押され、二歩三歩とたたらを踏んでいた。

「あ、すまん。大丈夫か？」

謝罪をしつつドミニクはその人物を見る。

ゆつたりとしているシャツとズボンを着ているため体型は判断できないが、身長はドミニクの顎程度。帽子を目深にかぶっているので顔も見えない。

「ああ、大丈夫」

その人物は小声で答え首を振った。

男と考えるには高めで、女性にしては低すぎる声。着ている服も男性ものなので、ドミニクはその人物を少年だと思った。

「悪かったな坊主」

「いや」

端的に答えその人物はドミニクの脇をすれ違っって行った。

その愛想のなさに、ドミニクは思わず顔をしかめる。態度が気に障ったということではなく、自分が避けられているようだと感じたのだ。

ドミニクの顔はお世辞にも親しみやすそうなものではない。良くいえば精悍で、悪くいえば強面だ。体つきだって大きめだし格好も無頼のものなので、普通の人からすれば避けられやすそうではある。事実、これまでも子供に懐かれたことや、街の若い女からモテた

こともない。

しかしああも避けることはないじゃないかと、若干いじけながらもドミニクは足を進めた。

ほどなく酒樽の形をした看板が見えた。目的の酒場だ。

壁に塗られた塗料もはがれ落ち、柱も腐りかけているところが多々ある、小さな建物だった。扉の脇には壊れた椅子やテーブルが積み重なっている。まだ日も高い時刻だというのに飲んでいるのか、中からは酔っ払い特有のでかい無遠慮な声が響いていた。そんなどこにでも酒場の前でドミニクは首をかしげる。

はてさて、どうやって情報を集めようか。

普通、酒場の店主は一杯の酒も飲まない奴を客とは認めない。このまま店に入って情報を求めても、金がないことがバレれば追いだされるだけだろう。

他の客から情報を集めようにも、奢りもしない男に与えてくれる傭兵などいやしない。

これが美人な女ならまた話は別だろうが生憎ドミニクは男。相手にすらされないだろう。

もっとも男でも若くて可愛らしい少年ならば近づいてくる趣味の男もいるが、ドミニクではそうはいくまい。もしドミニクの外見がそうだとしても、そんな手段に出ようとは思わないが。

どうしたものかとドミニクは懐に手を入れる。

しかしそこにあるはずの袋がなかった。

「あん？」

訝しげな声を上げさらにまさぐる。しかし見つからない。

どこか別の場所にでもしまったかと体中を調べてみるものの、やはり財布はどこにもなかった。

「やべ、落としたか？」

いささか焦った声が出る。銅貨が五枚しか入っていないとはいえ、あれはドミニクの全財産だった。何かに使ってなくなるというならまだしも、どこかに落として失うなどドミニクの根性が許さない。

慌ててドミニクは来た道に戻っていった。

狭い路地をドミニクは大柄な体を縮こまらせながら進む。中腰になつてひよこひよここと歩き、あちらこちらのゴミや木切れをひっくり返している男の姿は、傍から見れば随分と滑稽に違いなかった。

しかし幸いにして、ここにはドミニク以外の姿はなかった。

もし人目があつても、今のドミニクは気にしなかつただらう。それほどまでにドミニクの目は真剣だった。そんな真剣な表情で探しているのが、たつた銅貨五枚が入った小袋だということを考えれば、また別の意味で滑稽ではあつたが。

そんな自分の滑稽さに頓着せずドミニクは一心不乱に探すが、目的の物は見つからない。

路地の隅から隅を探しつつ、とうとう大通りまで戻ってしまった。

「くそつ、どこいったんだ！」

大通りの人ごみを眺めながら思わず毒づく。

目の前を通り過ぎる何人かが視線を寄こしたが、ドミニクにはそれに気づく余裕がなかった。

「誰かが持つてつちまつたのか？」

落とした財布を拾った人物が持つていったのかと考えた。

中身はそれこそ子供の小遣いほども入つてなかつたが、それでもたまたま見つければ持つていく者はいるだらう。なまじ小額だけに元の持ち主のことを考えてためらう奴もいまい。

しかしそうなると誰が持つていったのか。

大通りで確認してからすぐ路地に入ったので、落としたのは今来た道のどこかのはずだ。この道に入って酒場につくまでは十分もかからなかった。その間に誰かが通りすがつて持つていったのだろうか。

だがそんなわずかな間にそう人が通りすがるとは

「いや、待てよ……」

そういえば一人だけいたことをドミニクは思い出す。

「あの坊主がいたか。だとすりゃ、ぶつかつたときに落として……いや、スリやがったか！」

元々そのつもりだったのだろう。考えてみれば狭い路地とはいえぶつかるのは少しおかしい。

よそ見していたドミニクが背の低いあの人物を見逃すのはあるかもしれないが、逆のあの人物がドミニクの存在に気づかないとは思えない。目深に帽子をかぶっていたから視界が狭かつたとしても、ドミニクのような大柄な者に、それも槍やら鎧やらで歩くとそれなりの音がする。気づかないはずがない。

そう考えたドミニクは怒りに顔を歪めた。

「くそっ！ とっ捕まえてぶん殴ってやる！」

ドミニクは人ごみの中を迷惑も考えず駆けだした。

周りは迷惑そうに顔を歪めたが、ドミニクの必死な様子が銅貨五枚のためだと知ったら、迷惑以上に不憫に思ってくれたかもしれないなかつた。

すでに日も傾き二つの月が輝き始めた時刻。ドミニクは通りの角で座り込んでいた。

あれから数時間、とにかく街中を駆けずり回つたが、目的の人物を見つけることはできなかつた。

「あー、疲れた……」

ドミニクは項垂れ大きく息を吐いた。

探し始めた頃は怒りで忘れていたが、一昨日から水しか飲んでいなかったのだ。そんなただでさえ体調の良くないときに走り回ってしまったものだから、ドミニクは今にも倒れてしまいそうだった。

「今日はやめにするかあ」

眩き立ち上がる。

さすがにこれ以上は探すのは無理そうだった。

明日また探そうと考え、ドミニクはとりあえず今日の寢床を確保しなければと思う。



宿に泊まるような金は持っていない。かといってこんな通りの隅で寝てしまえば、不審者として衛士に連行されてしまう。寝るところがない以上、詰め所にも連れてってもらえばむしろ助かる気もするが、そうやってはきつと明日には街から追い出されることだろう。

ドミニクはふらふらとした足取りで狭い路地へと入っていく。

どんな街でも宿なしがたむろしているような場所はあるものだ。そういったところは基本排他的なものだが、事情を話せば一日くらいはなんとかなるだろう。今までも何度か経験があった。

それらしいところを探して十分程度経つ。やがて廃材置き場らしい場所に出た。

そこには数名の小汚い格好をした人々がたむろしていた。ドミニクのような傭兵らしき男もいれば、まだ十になるかならないかという子供いる。

ドミニクはきよきよと周囲を見回した。こういった場所にも元締めというような人物はいるものだ。その人物に場所を貸してもらおうようお願いしなければならぬ。

やがてドミニクは一人の男に目をつけた。

年はおそらくドミニクより十ほど上。日焼けした肌と傷だらけの顔が特徴的な男だった。

おそらくそいつがこの元締めだ。周りの皆が何も羽織らず寝っ転がっている中、その男だけは毛布をかぶっている。そして周囲の誰も不満そうな顔はしていない。少なくともそれを許されるだけの人物なのは間違いなかった。

ドミニクが近寄っていくと、その男性も気づいたのか、毛布をどけて視線を寄こしてきた。

目の前まで行くと地面に座っている男性と合わせるように、ドミニクも膝を下ろした。

「すまねえが旦那、一晚だけ端っこを借りてもいいかい？ 寝るとこがねえんだ」

とりあえず正直に願っただけを口にする。

男はしばらく観察するように、ドミニクの体をじろじろと眺めた。

「……あっち使いな」

一角を指さしそう言つと、男は興味を失つたようにまた毛布にくるまつた。

「あんがとよ」

ドミニクは男に礼を言い、指示された方へと歩いていく。

その場所は他と比べても汚れていた。薄暗い溜まり場の中でも一層暗く、多少は形を整えている周りと違って、ただ乱雑にゴミが散らかしてあるだけの場所だ。おそらく新入りや飛び入用といったところか。

まあ貸してもらえただけありがたいとドミニクは納得する。

そしてその場所にはどうやら先客がいた。暗くてよく見えないが、若い人物だった。

おそらく自分と同じような立場なのだろうと当たりをつける。

「隣り使っせ」

そういつてドミニクは地面のゴミを適当にかきわける。

声をかけられたことでその人物もドミニクに気づいたのか、軽く身じろぎする雰囲気伝わった。

「ああ」

否定とも肯定ともつかない声が返ってくる。

まあ了解したということだろうと考え、ドミニクはさらにゴミをかきわけ 動きを止める。

ドミニクは目を細めてその人物を見た。どこかで聞いた覚えがある声だった。

そして思い当る。

「テメエ、あの坊主か」

ドミニクの声に含まれた険を感じ取ったのか、その人物は大げさに過ぎるくらいの勢いで立ち上がった。そしてしばらく探るようにドミニクを見ていたが、次に息を飲んだ雰囲気が伝わってきた。

「……昼間の」

「やっぱダメエか！ やつと見つけたぜ！」

言うや否やドミニクはその人物に掴みかかった。

しかし相手も素早いもので、ドミニクの手がかかる前に、彼の脇をくぐり逃げていく。

「待ちやがれ！」

いきり立ちドミニクはその後を追って走り出す。

狭い路地を右に左にと追いかけてこをする二人。相手は体も小さくすばしっこいため、こういった道だとしても捉まえづらい。普通に足の速さだけで比べればドミニクの方が上だろうが、大きめな体と荷物が邪魔をして中々追いつけないでいた。

そのまま十分も二十分も走り続けたときだった。突然二人は袋小路に出た。

逃げいていた人物も目の前に出た壁に足を止め振り向く。

「これで逃げ場はねえな。財布返してもらうぜ」

ドミニクは笑みを浮かべた。

「お前もオレと同じ流れモンらしいな」

今の状況と先ほどの溜まり場での扱いを思い出し、ドミニクはそう結論づける。

もし相手がこの街に住みついている乞食なんかだったりした場合、今の状況はありえない。そういったやつらは街の隅々まで精通しているものだ。こうしてドミニクに追われても、逃げ場のない袋小路にあたることもないだろう。人に追われた場合の逃走経路などを確保しているはずである。

しかし相手はこうして実際に、ドミニクと相對しなければならぬ状況に陥っている。

ならば遠慮はいるまい。

この街に住みついている輩ならば、仲間がいる可能性もあった。しかしそうでないならここで応援が来ることもなく、どう扱っても後で報復に数人で囲まれるということもない。

「何、別に殺しやしねえよ。ついでに二・三発殴らせてもらうだけだ。そうびびんなくていい」

警戒するようにじりじりと後退りする相手に、その声をかけながら近づいていく。

そうしてニメールほどまで間を詰めると、相手は先ほどと同じように、ドミニクの脇をすり抜けようとしたのか、体を屈めて走りだした。

「逃がすかよ！」

しかしドミニクも馬鹿ではない。

前と同じ方法で逃がすわけもなく、横をすり抜けようとした相手の腕を掴んで動きを止めた。

相手は呻き声を上げる。勢いでその人物の頭から帽子が落ちた。

「あん？」

その下から出てきたものに、ドミニクは思わずマヌケな声を上げた。

短く切りそろえられた金髪。澄んだ湖のような青い瞳。多少薄汚れてはいるが白く滑らかな肌。細い顎のライン。ピンク色の薄い唇。軽く釣り上がった目でその人物はドミニクを睨む。

「放せ！」

「まさかテメエ……」

怒鳴り声に応えることなく、ドミニクはそいつの胸元に手をやった。

確かめるようにシャツの上から軽く握ると、予想通り柔らかい感触が伝わってくる。

「……やっぱ女か」

ドミニクが十代半ば程度の少年だと思っていた相手は、どうやら女性のようなだった。

「いつまで……触ってるんだ！」

その事実思わず呆然としてしまい、手をそえたままのドミニクに業を煮やしたのか、女性は怒り声とともに容赦なく蹴り足を上

げた 股間へと向かって。

「おごお!?!」

驚きで気が抜けていたドミニクはその攻撃を無防備にくらい形容できない叫び声を上げた。

倒れ伏すドミニク。両手を股間にそえて尻だけを上げた体勢で、彼は地面に突っ伏した。

「ふんっ!」

ぴくぴくと痙攣しているドミニクを見下ろすと、女性は鼻を鳴らし足早に去っていく。

男性しか味わうことのできない痛みと気持ち悪さに身動きが取れず、青ざめた表情で呻きながら、視線だけでその女性の背を見送る。心なしか霞んでいる視界。ドミニクはぎりぎり歯を食いしばった。

「あのアマ……ぜってえ犯す!」

ドミニクの口から放たれた憎々しい声は若干涙交じりであった。

結局ドミニクが動けるようになったのは、それから十五分後のことである。

「どこにもいやしねえ……」

昨日よりも一層おぼつかない足取りでドミニクは大通りで足を進めていた。

夜が明け太陽が顔を出し始めた時刻に、空腹のせいでいつもより早く目覚めてしまったドミニクは、じつとしているより気がまぎれるだろうと、早朝からあの女性を探して街を練り歩いていた。

結局、あの後ドミニクは袋小路で夜を明かした。

動けるようになってから、一度はあの溜まり場に戻ろうとも思った。しかし予期せぬ再会でついつい騒ぎを起こしてしまったので、今さら戻っても歓迎はされまいと判断したのだ。誰だって住処を騒がす奴を、わざわざ招きいれるとは考えられない。ああいった場所ではさらにだった。

いつ見回りが来るかもわからない場所で夜を明かすのは少し不安だったが、幸いにして目を覚ますまで誰かに見つかるようなことはなかった。

ともかく目覚めたドミニクは当てもなく街を歩き回り、結局昼近くの今まで成果は出せないでいた。

疲れた足取りでドミニクは進む。

そのせいかうまく足も動かず、ドミニクは何もないところで躓き転倒してしまった。

「痛っ！」

受け身を取ることすらできず、地面に顔からぶつかった。

「くそっ、ついてねえ……どいつもこいつもあのアマのせいだ！」  
よろめきながら立ち上がる。ついでに口から罵倒を吐きだした。

もう彼の中では、今つまづいたのも、腹が減っているのも、ここ

数週間仕事が見つからないのも、全てあの女性のせいということになっている。ドミニクの脳裏には、自分を見下ろしながら嘲笑する女の顔が焼きついて離れないでいた。

ふらふらと歩いていると広場に出る。

誰のものかわからない銅像を中心に円形に広がり、東西南北へと通りが伸びていた。

街の中心地である中央広場には様々な露店が出ている。

雑貨やら装飾品やらを売っている店はともかく、食べ物を出している屋台なんかもあるものだから、その香りのせいでドミニクはさらに空腹感を覚えた。

「拷問か……」

ゲンナリとした表情で呟く。もう立っているのも辛く、ドミニクは広場の隅で腰を下ろした。

こんな体調ではもう女を探すどころではない。冗談抜きで死んでしまう。

荷物にあった水も飲みほしてしまい、もう腹に入れるものがないもなかった。

「おう、あんちゃんよ」

すると、もう空に浮かぶ雲さえ美味しそうに見えてきたドミニクに、横合いから声かけられた。

ドミニクがそちらに視線をやると、横の露店で品物を広げていた男が、実に迷惑そうな顔をしていた。

「店のすぐ横でんな顔して座り込むのはよしてくれや、客が寄りつかねえ」

確かに広げられている品物を見ようとしても、すぐ横でげっそりとした大柄な男が座り込んでれば、客はすぐに逃げてしまうだろう。それ以前に近寄ろうとすらしないかもしれない。もっとも、露店の店主自体もあまり愛想の良い顔とはいえないので、原因はドミニクにあるだけとはいえないかもしれないが。

それはともかくとして、通行人の方へと視線を移してみれば、何

人かがちらちらとドミニクを見て顔をしかめている。一度視線があった若い女性など、あからさまに嫌そうな表情をしてから、足早に離れていった。

その様子に何気なく傷つきながら、ドミニクは店主に顔を戻す。「そりゃワリイが、ちよつと勘弁してくれ。腹へって動けねえんだ」申し訳ないとは思うが、今のドミニクは立つことすら億劫だった。しかし店主からすれば関係ないことで、不機嫌そうに鼻を鳴らされる。

「お前さんの事情なんて知ったこつちゃねえよ」

「いやほんとワリイな。十分、いや五分だけ勘弁してくれ」

口の端を軽く曲げるだけの笑みを浮かべていうと、ドミニクの体調が思わしくないことが見てとれたのか、店主も軽く舌打ちだけをして睨みつけるような顔を止めた。

「つたく、いい迷惑だぜ。五分したらどっかいけよ」

「ああ」

応えると店主はドミニクから視線を外す。

そうしてドミニクがぼんやりと空を眺めていると、隣りからガサガサと音が聞こえた。何をしているのか気になったドミニクが、改めてそちらに顔を向けると、店主が手に持つらしい袋を漁っているところだった。

店主は中から何かを取り出す。見ればそれは食べ物のようなもの。もう昼も近いことだし、こうしてドミニクが近くにいる以上客も寄りつかないと判断したのだろう。店主は持ってきた昼食を取るつもりのようなのだ。

パンに薄く切った炙り肉と野菜を挟んだだけのシンプルな食べ物。ほのかにマスタードの香りもした。

ドミニクは店主がそれを取り出し口元に運ぶの思わず凝視する。すると、ドミニクの腹が盛大に音を立てた。

「……………」

「……………」



口を開いた体勢で動きを止めた店主がドミニクに顔を向ける。視線が合った。

再度食べようと店主は顔を背けたが、何か訴えかけるようにさらにドミニクの腹が鳴る。

店主は顔をしかめた。

「……ひとつやるからさつさとどっか行けよ」

「マジか!? あんた神だな!」

「うるせえ、ぶん殴るぞ。いいから早く食ってこっからいなくなれ」

「おう! 十秒で食ってやるぜ!」

うるせえ、ともう一度だけいうと、店主はもうひとつ取り出して食べ始めた。

ドミニクは貰ったパンを手にとって感動する。三日ぶりのまともな食事だ、軽く涙も出ようというもの。できれば大事に食べたいところだが、十秒で食べると豪語した手前、そんな卑しいマネはできない。

店主からしてみればどうでもいい決意を胸に、ドミニクは大きく口を開けてかぶりついた。

「うめえ」

実感のこもった声でそうもらす。

夕方ぶりの食事は実に美味だった。固いパンも油だらけの肉もしなびた野菜も、今のドミニクには高級レストランのフルコースよりよっぽど美味しい食べ物だった。もちろんそんなものを食べたことはないが。

片手程度の大きさのパンは三口でなくなった。

味を反芻するように目を閉じて浸っていたドミニクだが、しばらくすると自分の膝を叩いて「よしっ」と気合をいれると、つい数分前までの悲愴さを一切感じさせない動きで立ち上がる。

「おっさん、ごっそさん」

「おう、もう二度と俺んとこ来んじゃねえぞ。客としてなら構わんが」

「金が入ったら考えとく」

ひらひらと手を振ってその場から離れるべく足を動かす。が、ぴたりと歩みを止めたドミニクは、少しの間何かを考えるようにすると、改めて店主のもとへ足を戻し始めた。

戻ってくるドミニクの姿を見た店主が、再度嫌そうに顔をしかめる。

「なんだお前、もう来んなって言ったばっかじゃねえか」

「いや、ついでに聞きたいこと思いついた」

「余計なこと思いつくんじゃねえよ……で、なんだ？ さっさと行ってとつと行け」

ドミニクはぞんざいに尋ねてくる店主に苦笑いをこぼしながらしやがみ込む。

「いやよ、かさねがさねワリイが、どっかで傭兵募集してることかねえかなと思つてよ。見てのとおりオレは傭兵やつてるんだが、どうにも最近は仕事にありつけなくてな。そのせいで稼げなくて倒れる寸前だったんだが。探してみようにもどうしようもなくてよ。おっさん知らねえかい？」

そう尋ねると店主は胡乱な視線をドミニクによこしてくる。

「タカリが傭兵なあ？ 頼りねえなあ」

「いやいや、こう見えても槍の方にはちっと自信があるんだぜ？」

「自信を持つのは勝手だがな……募集つていったらあれだろ、今領主さまとこでやつてんだろ」

呆れたため息とともに出された言葉にドミニクは思わず目を見開いた。

正直に言えば有益な情報が返ってくるとは思わなかったのだ。一般人からすれば傭兵などヤクザな稼業で、あまりそれらについて情報を仕入れようとは思わないものだ。酒場や娼館など、よく傭兵がよりつくような場所に勤めているならともかく、こうして街角で露店を開いている店主が知っているとは予想外だった。

「おっさん、よくそんなこと知ってんな」

「良くも何も、お前には目がついてねえのか。そこら中に張り紙があるじゃねえか」

店主はすぐ近くの建物を指さす。壁には確かに張り紙があった。しかし、それを見たドミニクは少し顔をしかめ、そして躊躇いがちに口を開いた。

「……オレは文字読めねんだよ」

店主は若干眉を上げると、小馬鹿にしたように鼻で笑った。

「今どき文字も読めねえでどうすんだよ」

「うっせ、オレは元々きこりの息子だから読めなくてもよかつたんだよ。それに全くつてわけじゃねえし」

負け惜しみのように小声でつけ加えたドミニクに呆れ顔をする店主。彼は「まあどうでもいいがな」というと、張り紙の内容を確かめてからドミニクのそれを教えてくれる。

「街の東にある森にオーク鬼の群れが出たってよ。それなりの数を応募してるらしいぜ」

オーク鬼。一般的に『亜人』と呼称される凶暴な種族のひとつである。

身長は二メートル以上あり体重は成人男性の五倍もある。そこまでの巨体を持っている上に、知能もけて低くなく、雑なものではあるが鎧や武器を持ち、単独ではなく複数で行動することも多い。

普通の人間ならば一人では決して太刀打ちできないレベルの相手である。人間の子供を好んで食らう性質なため、街や村の近くで発見されると討伐隊が組まれるのだ。

ここ、ハルケギニア大陸では人間に敵対する種族のうち、ポピュラーな亜人の一種だった。

「そりゃ物騒なことだな」

そう言いつつドミニクの顔には笑みが浮かんでいた。

平和主義とはいわないが、別段、好戦的な性格をしているわけではないので、オーク鬼と戦えることが嬉しいわけではない。久々に仕事にありつけそうなのが喜ばしいのだ。

傭兵稼業など、仕事がないときはまったくくないもので、もしあつても報酬を渋られることも少なくない。その点、領主の募集ということならそちらの心配もないだろう。ケチな貴族など誰も仲良くしようとは思わない。

これなら久しぶりにベッドで寝られそうだと、ドミニクは喜んだ。「さつきまで倒れそう立った野郎がオーク鬼討伐ね……まあそりゃいいが、喜ぶのは早えんじゃねえか？」

「あん？ どうしてだよ」

にやにやとしていたドミニクは店主の言葉に笑みを引つ込め、訝しげに首を傾げる。

店主は張り紙を指さしながら、己の懐に手を入れて懐中時計を取り出し覗きこむ。

「募集は今日の正午までだから……もう締め切りまで十分もねえぞ」  
そう言つてドミニクに時計を見せつけた。

「マジか！？ じゃあさつさと行かなきゃ……って、おっさん、領主の屋敷ってどこだ！？」

「あっちだ。真っ直ぐ行つた突き当り。走れば間に合うんじゃないかねえか？」

「そつか、助かった！ 色々ありがとな、おっさん！」

「感謝はいいからさつさと行け、んでもう来んじゃないぞ」

「そいつはわかんねえな、じゃな！」

シツシツとうつとおしそうに手を振る店主に振り返し、ドミニクは走り去っていった。

その背を見送りつつも、店主はようやくやく仕事が再開できると、道行く人に声かけるのであった。

中央広場から北への通りを真っ直ぐに歩いて十五分ほどの位置。コンピエーヌの街の北區画に、領主であるフレーズ伯爵の住まう屋敷はあつた。

商業区域や町民の住居區画から少し離れた場所に建つ屋敷は、す

ぐ隣りに練兵場を併設していることもあって、周囲数百メートルに建築物が存在しない。

普段は閉じられている正門も今日に限っては解放され、前庭部分では多くの人が賑わっていた。

オーク鬼討伐のためにかけられた募集は、多数の希望者を集めている。誰も彼も腕っ節に自信のありそうな者ばかりで、そこから威勢の良い声が響いていた。中には元気があまりすぎて、喧嘩開始まで秒読みといった風なものも見かけられる。

「そろそろ時間か？」

「ああ、もうこれ以上は来ないだろう」

そんな中、希望者の受付をしていた二人の衛士が言葉を交わす。すでに期限である正午も間近に迫っている時間だ。討伐にあたり望んでいた人数も充分集まったところなので、もう受付を止めて説明に入ろうと片づけ準備を始めようとしていた。

すると、街の方から誰かが急いで走ってくるのが見えた。

その人物は周囲の傭兵連中をかき分け受付の前までたどり着くと、真っ赤になった顔を寄せてきた。

「まだ受け付けてるか!？」

そう怒鳴りつけるのは、広場から全速力でここまで駆けてきたドミニクであった。

「あ、ああ、大丈夫だ。ぎりぎりだが時間内だからな」

受付はその勢いに押され、腰を引きつつ応える。

するとドミニクは安堵のため息を吐き、体から力を抜いてその場にしゃがみ込んだ。

「そうか、良かったあ……」

思わず二人の受付は顔を見合わせ頭をかく。怒るべきか流すべきか悩んでいるようだった。

「ともかく、希望者なら名前を覚えてくれるか？」

流すことを選んだらしい。しゃがみ込むドミニクを見下ろし尋ねてくる。

息を整えていたドミニクは、そう言われると顔を上げ、一度大きく息を吐き立ち上がる。

「あ、ああ、そうだな。すまんかった。オレはドミニクだ」

「ドミニクね。武器は槍だけか？」

「一応剣も使えないこたあねえが、基本的にはこれだけだな」

「ふむ、そうか……」

ひとつ頷き、受付の男は手元の用紙に名前と備考を書き加えた。

「よし、これでいいだろう。お前が最後のようだな。これから説明に入るから待っていてくれ」

「あいよ、よろしく頼むぜ」

応えてドミニクはその場を離れる。

適当な場所に落ちつくと、周囲から視線を集めていたらしいことに気づいた。それも無理もないことだろう。あれだけ騒げば目を引くし、中には気分を害する者もいたかもしれない。

とくに知り合いがいるわけでもないドミニクは、好意的でない視線に居心地悪そうに肩を揺らした。

「よーし！ それじゃあ全員静かにしてこっちを見てくれ！」

衛士の声が響く。ようやく外された視線に安堵し、ドミニクもそちらへと顔を向けた。

「希望者総勢三十一名、これで受付を終了しようと思う。これから討伐についてももう少し具体的な内容を説明するが、その前にやはり止めておきたいという者はいるか？ 遠慮なく言ってくれ」

一度言葉を止めて衛士は辺りを見回す。声を上げるものはいなかった。

「今のところいないようだ。わかった。説明後にもう一度尋ねるから、辞退する者はそこで言ってくれ」

そう言つと衛士は傍らに立つひとりから何やら紙を受け取った。報告書か何かなのだろう。その紙を眺めながら、衛士は傭兵たちに対し口を開く。

「張り紙に書いてあったとおり、今回の目的はオーク鬼の討伐だ。

物見が調べたところによると、街から東へ一時間ほどの距離にある森に、オーク鬼の群れが住みついたとのこと。数は見つけた限り十頭らしい」

衛士の言葉に傭兵たちが少しどよめいた。

オーク鬼は一頭で傭兵五人分にも匹敵するとされる亜人だ。それが十頭というと、単純に考えても傭兵五十人を相手にするようなものである。募集で集まったのは三十一名。まともに相手するのは難しい。

動揺を見てとったのか、衛士はひとつ咳払いをしてから、大きめの声を上げた。

「あー、味方の数が少なくて動揺しているようだが、そう心配しなくていい。領主さまの兵である我々衛士からも人員は出す。それに加えて、メイジの方が三名随行してくれるとのことだ」

メイジ、という単語に傭兵連中からほっとした空気が流れ出た。魔法という特殊技術を使用する人間を総じて『メイジ』と呼称する。メイジは杖一本とルーンの呪文だけで、驚異的ともいえる現象を起こす人々だ。熟練となれば一人で傭兵の一個中隊を凌駕するといふ。

メイジが討伐隊に加わるならばそう危険もないだろう。傭兵たちは笑みを浮かべた。

「討伐には明日の朝九時に街を出るつもりだ。だから君たちはその一時間前くらいに、またここに集まってもらいたい。そのときに隊分けや実際の手はずを説明する。ここまで何か疑問はあるか？」

ああ、それと先ほど言ったとおり、説明を聞いて辞退したくなつた奴がいたら出てくれ」

少し待って声が上がらないことを確認してから衛士は続ける。

「よろしい。ではこれから前金を配ろうと思う。危険な任務のためと、領主さまからのご配慮だ」

おおっ、と思わず傭兵たちから歓声がわいた。

通常、戦争などの大きな仕事でなければ前金などは配られない。

もし配ったとしたら、それだけを持って逃亡する者などが出るからだ。そのため、今回はそれが配られるというので驚きが大きかった。「ちなみに……」

ざわめきが増える中、衛士の声上がる。

あまり大きなものではなかったが、内包される真剣さに傭兵たちも口を閉じて注目した。

「わかっているとは思うが、前金を受け取っただけでトンズらするような奴は、後日違約金を払ってもらう。逃げようとするならば、こちらとしてもそれなりの対応をするしかない。周辺の街には手配を出すし、こつちから追手もつけるつもりだ。何せ領主さまの信用を無碍にするのだからな、容赦をするつもりはない。もし逃げるなら、もう二度と傭兵稼業ができなくなるのを覚悟をしておけ　わかったか？」

そう言っただけで衛士は鋭い目つきで周囲を睨みつけた。思わず傭兵たちも息をのむ。

しばらく、静けさだけがあたりに沁み渡った。

少しすると、衛士は強張った顔をほころばせ口を開く。

「なに……とはいえそう心配しなくてもいい。参加すればいいだけのことだ。無事任務が終われば成功報酬も渡すし、とくに手柄を上げた者には追加報酬も渡す。領主さまは気前がいいから旨いと思うぞ」

笑みを見せる衛士に、傭兵たちの纏っていた空気も弛緩した。

「では配るとしよう。こつちに三人いるので、適当にバラけて並んでくれ。きちんと全員分あるので急がないように。早くに貰えたからって、その分金額が増えるわけじゃないからな」

言い終わると共に、傭兵たちは袋を持って立つ三人の衛士の前に移動していく。

ドミニクもそれに合わせ動こうとしたが、しかし視界の端に映ったものに思わず足を止めた。

傭兵たちの集団から少し離れた場所。そこに男が二人立ち、何や



ら話し合っていたのだ。

見た目は集まっている傭兵と大差ない。どちらもぼろの革鎧に、片方は腰に剣を差し、片方はドミニクと同じような槍を持っている。そんな二人が、何やら内緒話するように顔を突き合わせていた。

ドミニクは首をかしげる。列に並ぶ気はないのだろうか。

外見で判断すれば、あの二人も今回の募集に希望した者のはずだ。それならば前金を受け取る権利があるはずだが、その二人は一向に並ぼうとする気配がない。

まさか前金は要らないなんて、そんな変な傭兵がいるとは思えなかった。

少し観察していたが、結局二人は並ぶことなくその場を離れていた。

一体なんだったのだろうとドミニクがぼんやりしていると、背後から声がかけられる。

「おい、お前はいいのか？」

そちらに顔を向けると、すでに大体の傭兵は受け取った後で、衛士がドミニクを手招いていた。

「要らないんなら要らないで構わないが、早く来ないと俺たちも帰っちゃうぞ」

「おお！ 待つてくれ、もちろんオレも貰う！」

慌てて衛士に走り寄るドミニクの頭からは、二人のことなどはすぐに消え去っていた。

領主の屋敷を辞したドミニクは、一人狭い路地を歩いていた。彼の手にはワインの瓶が二本持たれている。先ほど貰った前金を使い適当な店で買った、どこにでもある安いワインだった。

周囲を見渡しながら、記憶を頼りにドミニクは路地を進む。目的地は昨日の廃材置き場だった。

なぜドミニクがそこを目指しているかといえば、昨日の騒ぎについて詫びを入れようと思ったからだ。

流れとはいえ世話になるはずだったのに、初めからその気があったわけではなくとも騒ぎを起こしてしまったのだ。あそこの住人たちが自分にあまり良い感情を抱いていないのは、想像に難くなかった。

見た目と反して律儀なところもあるドミニクは、それについて申し訳なく思っていた。

また、オーク鬼の討伐を終えた後もしばらくこの街に滞在するつもりでドミニクとしては、街を根城にする人々と争いを起したままにしておきたくなかった。そういう奴らは根を持つ気質の者が多く、後々制裁なりを受ける場合も少なくないからだ。街を知り尽くした相手では逃げるのも叶わない。

しばらく見覚えのある路地を歩いていると、どうやら記憶は正しかったらしく、廃材置き場に出た。

相変わらずそこには数名の宿なしがたむろしており、姿を現したドミニクに胡乱な視線をくれる。

ドミニクは彼らの視線を意識的に無視しつつ、元締めの方へと歩み寄って行った。

昨日と同じ場所で寝っ転がっていた元締めの方は、ドミニクを見てとると、目つきを険しくさせる。

「てめえは昨日の……」

「よう旦那、一日ぶりだな」

努めて明るい調子でドミニクは片手を上げる。傷のある顔を持つ男の眼光はそれなり迫力があつた。

「よくここに来る気になったな。まあいい、手間が省けたってものだ。おいお前ら！ こいつを」

「ちょ、ちょっと待ってってくれって！ 今日はその件の詫びに来たんだよ！」

周囲に命令を下そうとした男の言葉を慌てて遮る。

それとなく視線を走らせてみれば、何人かが角材や棍棒のようなものを取り出し、ドミニクの周りを囲むようにして近づいてくると

ころだった。若干冷や汗が背中を流れる。

「ああん？ ワビだあ？」

「ああ、ほら、安モンでワリイけどよ。これ、飲んでくれよ」

ねめつけるように視線を寄こしてくる男に、ドミニクは手に持ったワインを渡す。

男はワインを受け取ると、ためつすがめつ瓶を眺めた。そしてドミニクの顔に視線を移し鼻を鳴らす。

「おい、誰か器持ってこい」

ドミニクの顔から視線を外し、横に顔を向けてそう言った。

声に応えて周りのうちの一人が木製のコップを持ってくる。それを受け取ると、男はワインの蓋を開け、大雑把に中身を注いでいった。コップに満たされたワインを少し眺め、そして一息である。

「……マズかねえな。おい、お前らも飲め」

後半は周囲に向けての言葉だった。どうやら許してもらえらしい。

男は一本を自分の横に置き、もう一本を先ほどコップを渡してきた男にやった。

「あのよ旦那、ついでに聞きてえことがあるんだが」

しゃがみ込みつつドミニクはそう切り出す。ここに来たのはもう一つ目的があったのだ。

男はじろりとドミニクを見ると、口を開かず顎をしゃくって続きを促す。

「昨日オレと騒ぎを起こした奴がいただろ、あいつのこと覚えてるかいい？」

「……ああ、あのガキか。そついやあの野郎はきてねえな」

男は不機嫌そうに鼻を鳴らす。どうやら女だとはバレていないらしい。

まあよほど観察眼が優れてでもないなければ、顔を見るでも体を触るでもない限りバレはしないだろう。

オレもわからなかったしな、とドミニクは内心頷き続ける。

「あの後、結局逃がしちまってな。それからオレも探したんだけどよ、どうにも見つからねえんだわ。で、よ。旦那があいつのことなんか知ってたら教えてくんねえかなと思ってな」

そう尋ねると、男は虚空を見上げるようにして少し考え込む。

「なんかつつつてもな、あの野郎と会ったのは昨日が初めてだからなあ」

「やっぱ流れモンかい？」

「少なくとも前から街にいる奴じゃねえな。それなら俺が知らないわきゃねえ。昨日、お前が来る少し前にここに来て、ぼそぼそと小こい声で端っこ貸してくれてんだから許可したんだが……くそっ、思い出したらムカツ腹が立つてきた！」

最後の方は若干ドミニクを睨みながらつけ加えられた。

騒ぎを思い出して気分を損ねたらしい男に苦笑いを返しながらドミニクは考える。

どうやら予想通り、あの女はどこから流れてきた者らしい。それはこうして元締めの方が言っているのだから、少なくともその点については間違いではあるまい。

しかしだとすると、もうあの女はこの街にはいない可能性が高い。こういった場所でもめ事を起こし、しかも自分のような者に追われているのを自覚しているならば、そんな場所に長居しようとは考えないだろう。何か目的があって滞在しているならともかく、宿にも泊まれない女がそうとは考えにくかった。

ドミニクは小さく舌を打つ。足取りは掴めそうもないし、仕返しできる日が近いとはいえなさそうだ。

「仕方ねえかな……」

「あん？　なんか言ったか？」

小さくこぼれた声に男が反応した。ドミニクは首を振って応える。

「いや、なんでもねえよ。あんがとな旦那、騒がして悪かった」

礼と詫びだけを言葉少なに伝えドミニクは立ち上がった。もうここに用はない。

ともかく今気にするべきは明日のオーク鬼討伐の件についてだ。女のことは、それが終わってからでも時間はある。まとまった金も入るし、少し時間を使って探してみてもいいだろう。

きっかけはたかが銅貨五枚だが、ドミニクは忘れるつもりはないようだった。

一度大きく伸びをする。体の節々が鳴った。

ここしばらくまともに体を休めなかったので、少々疲れも溜まっているようだ。

早いところ宿を探し、英気を養うために休んでしまおう。ワインを買ったので貰った前金も減って、あまり良いところに泊まれそうではないが、それでもベッドで寝れるだけ大分マシである。

残りはいくらあったかなと考えつつ、ドミニクは廃材置き場を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0256n/>

---

粉挽き女と傭兵男

2010年10月8日14時34分発行